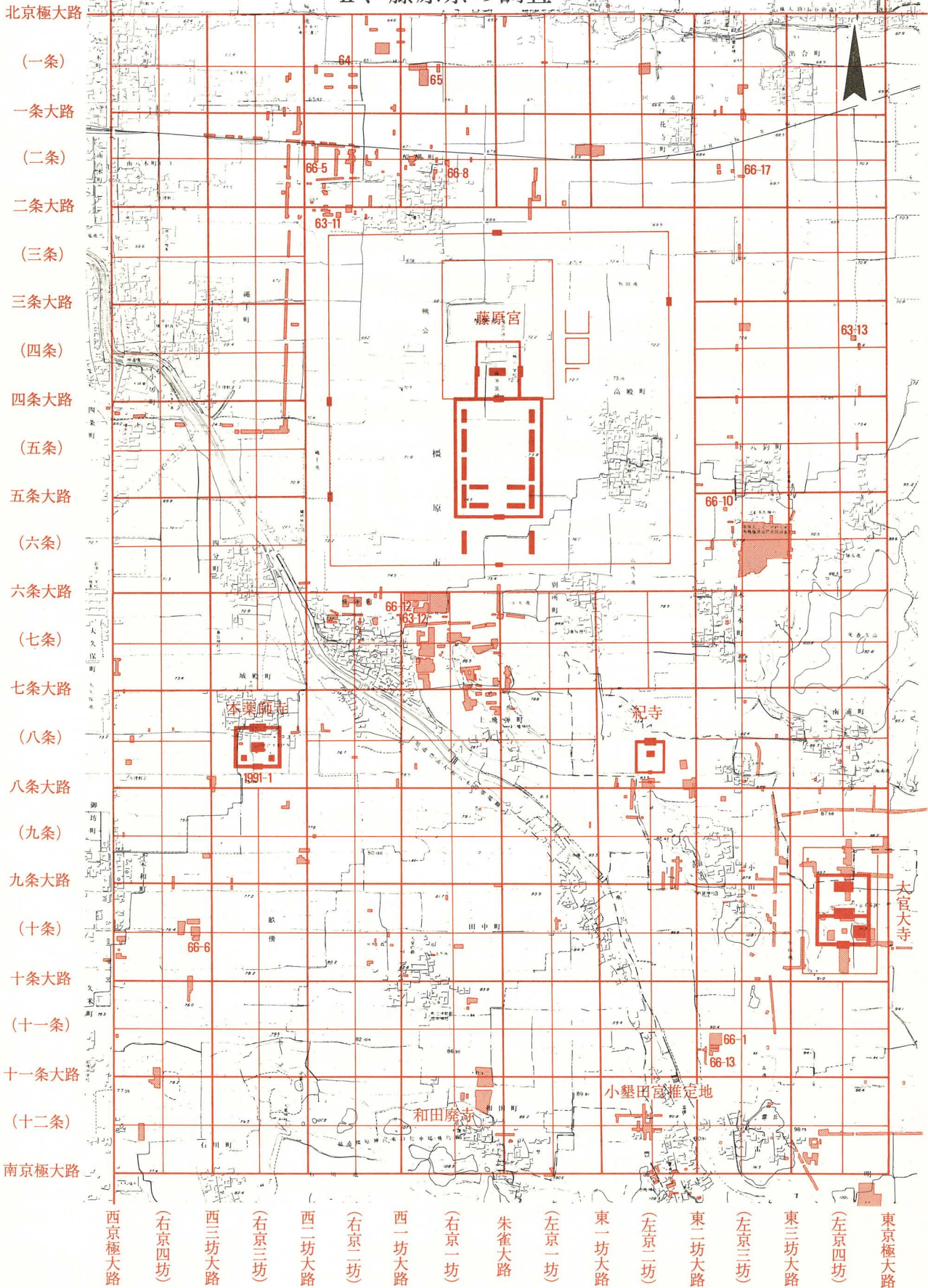


Ⅱ、藤原京の調査



藤原京内調査位置図

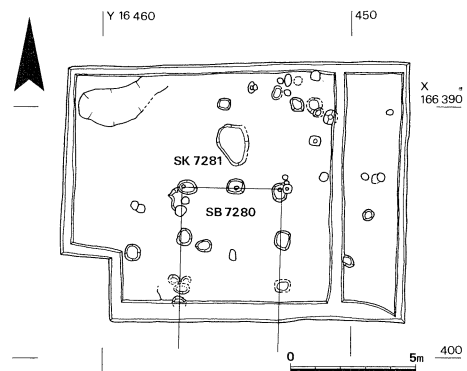
1、左京四条四坊の調査（第63-13次）

（平成三年三月～四月）

この調査は、宅地造成に伴う事前調査として、橿原市膳夫町で実施したもので、調査面積は136㎡である。調査地は左京四条四坊東北坪の西南部に位置する。昭和五十年には今回の調査地の東南方で調査を行ない、四条大路を検出している（第27-14次調査、『概報10』）。

調査区内では、耕土・床土を排除すると遺構面である灰褐色微砂・暗茶褐色粘質土に達する。検出した主な遺構は、掘立柱建物1棟、土坑1基である。SB7280は桁行2間以上、梁間2間の南北棟建物で、柱間寸法は桁行が2.1m、梁行が1.8mである。SK7281は不整形の土坑で、深さは0.15mと極めて浅い。

出土した遺物は少なく、特に遺構に伴うものが極めて少なく、また土器も土師器の破片のみであるために、遺構の年代を特定することは極めて困難である。



第63-13次調査遺構実測図（1：300）

2、左京六条三坊の調査（第66-10次）

（平成三年十一月）

この調査は個人住宅建設に伴う事前調査として、橿原市木之本町で行ったものである。調査地は左京六条三坊北西坪にあたる。左京六条三坊では、過去の数次にわたる調査によって、藤原宮期では四町占地と推定される大規模な土地利用の状況が判明するとともに、京以前では「木之本廃寺」、奈良時代には「香山正倉」の存在が推定されている（第45～47・50・53次調査、『概報16』～『概報18』）。今回の調査も関連遺構の検出が期待されたが、調査予定地はすでに盛土がなされているのに加えて、工事排土が高く積まれていたために、

調査面積は南北10m・東西7.5mの75㎡に留まった。

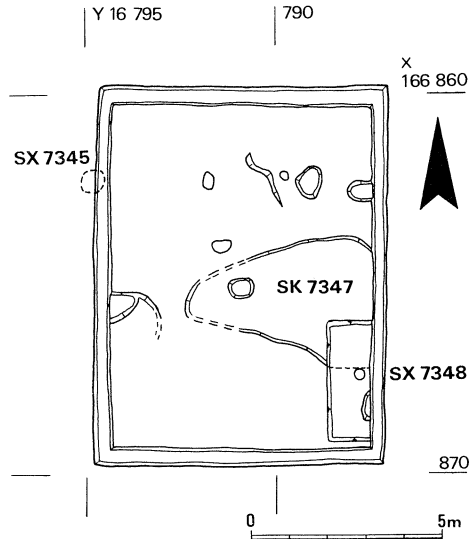
調査地の層序は盛土・水田耕土・床土・淡黄灰色ないし淡青灰色微砂となり、遺構検出は地表下0.7～0.8mにある微砂層の上面で行った。

検出した遺構には藤原宮期のもとして、不整形の土坑SK7347・小穴SX7345、京以前のもとして小穴SX7348のほか

に東西方向に掘られた中世の小溝がある。

土坑SK7347は、最深部で約0.2mあり、褐色砂質土で埋められている。土坑からは少量の瓦と土器が出土した。小穴SX7345は調査区西壁断面にかかるもので、一辺0.7m、深さ0.25mである。小穴SX7348は、藤原宮期の遺構面下0.3mで検出した直径0.3m、深さ0.07mの小穴である。遺構面である微砂層の下は、微砂と粘質土の間に砂礫層が堆積し、あたかも調査区全域が流路であったような状況を示していた。この流路の堆積土の一部からは7世紀後半を下限とする土器・瓦片が少量出土した。

以上のように、調査面積が小規模なため、藤原宮期や奈良時代のまとまった遺構は検出されなかった。今後、当地区での大規模な計画調査が望まれる。



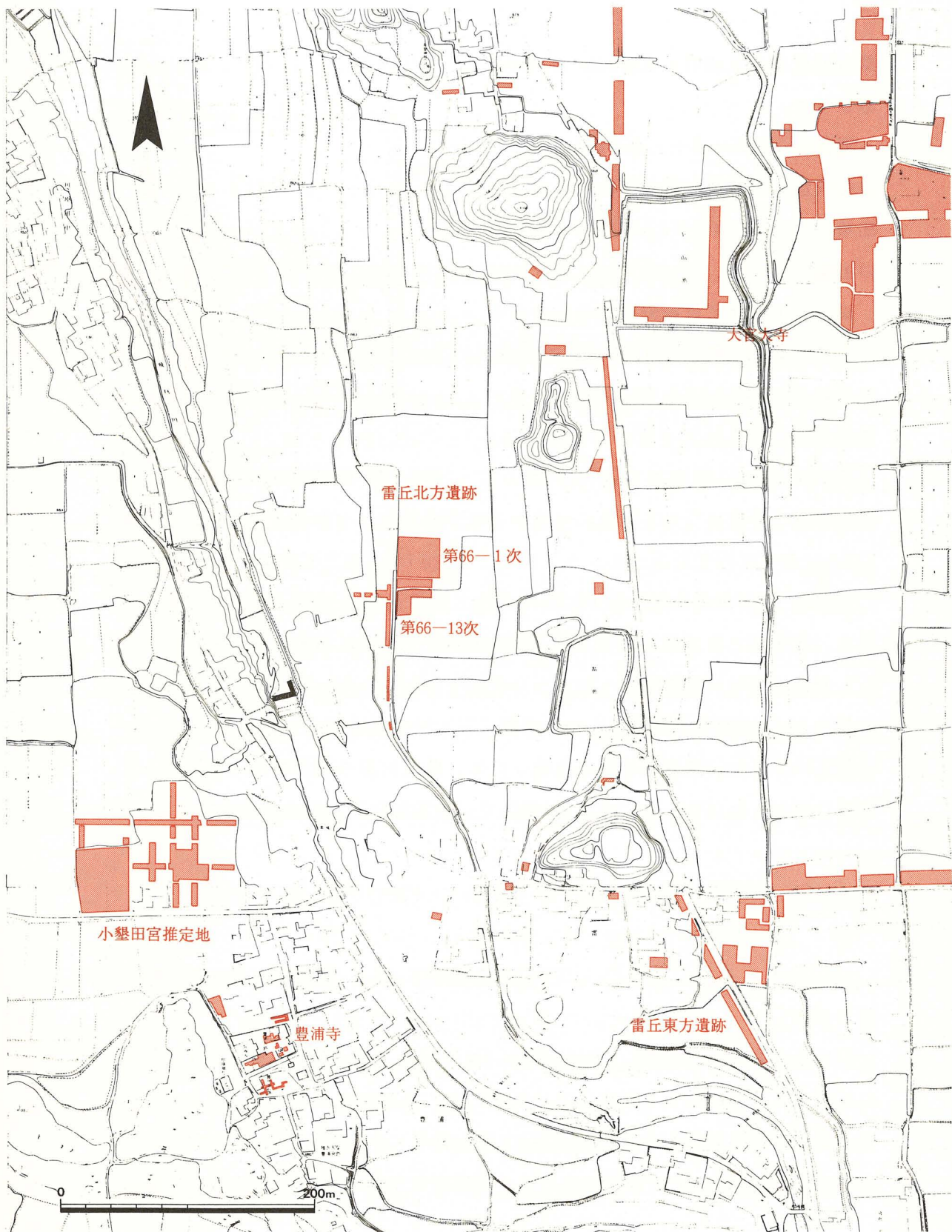
第66-10次調査遺構実測図(1:200)

3、左京十一條三坊の調査(第66-1・13次)(雷丘北方遺跡)

(平成三年四月～八月・同十二月～平成四年四月)

はじめに

雷丘北方遺跡第1次調査(藤原宮第66-1次)は、橿原神宮東口停車場飛鳥線の新設によって移転する民家住宅の新築に伴う事前調査として行ったものである。調査地は高市郡明日香村大字雷(字稲葉縄手)で、雷丘の北北西200m、ギョウ山の南西80mほどの位置にあたり、藤原京の条坊では左京十一條三坊西南



雷丘周辺発掘調査位置図

坪の中心部から西南部に相当する。当地域周辺ではいままで発掘調査が行われたことなく、北方の字カナヤケで重弧紋軒平瓦を採集し、昭和五十年頃に田に暗渠を敷設した際、柱根2本と土器若干が出土した（藤井利章「明日香村雷出土の柱根」『青陵』第48号 1981）程度の知見しかなかった。

第1次調査の結果、7世紀後半から奈良時代にかけての大規模な四面庇付東西棟建物とその西方に廊状に並ぶ2条の南北柱穴列を検出し、四面庇建物は藤原京左京十一條三坊西南坪の中軸線にほぼ合致し、この建物を中心に回廊が巡る空間が想定された。建物の構造・規模や廊を伴う形態などから見て、官衙あるいは宮の可能性があり、きわめて重要な遺跡であるとの認識から、県道敷設予定地とその隣接地(字竹ノ花)を対象として範囲確認を目的とした第2次調査(藤原宮第66-13次)を行った。

以下においては、両次調査の結果をまとめて報告することにしたい。

遺 構

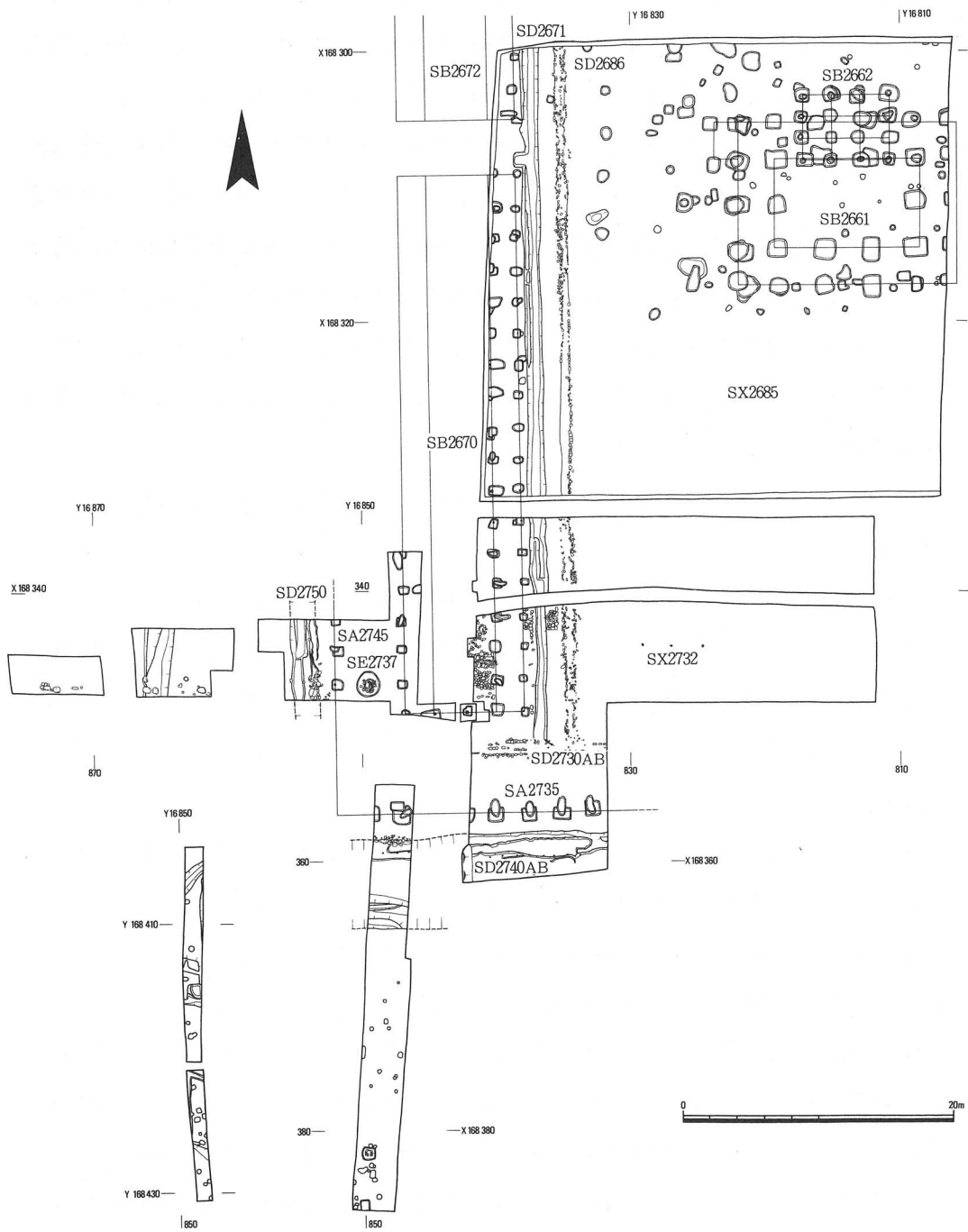
調査地は北から小山・ギヲ山・ギヲン山・雷丘と続く低い丘陵の西に広がる緩やかな斜面上の水田で、西約100mには飛鳥川が西北へ流れ、その氾濫原を示す地形が調査区の西端部まで及んでいる。全体の地形は西北方へ低くなり、古代の遺構はこの傾斜地に厚さ0.5m～1mの大規模な整地を行ってから造られている。

検出した主要な遺構は、出土遺物からみて、天武朝末期に造営され、藤原宮期を経て、奈良時代前半に廃絶したと考えられる。また、建物・溝に造り替えがあることからA・Bの2時期に分けることができる。

A 期 掘立柱建物3棟・掘立柱塀2条・溝4条がある。

建物SB2661は3間×2間の身舎の四面に庇が付いた東西棟建物である。柱間寸法は身舎の桁行が12尺、梁行が11尺、庇の出が9尺である。柱掘方は一辺2mに近い方形で、柱はすべて抜き取られていた。北庇に柱筋を揃えて西6尺のところには2個の柱穴があり、階段用の柱と思われる。建物内部で径0.3mほどの円形の柱穴をいくつか検出した(SX2665)。これらは床束であろう。

建物SB2670はSB2661の西約16mにある長大な南北棟建物で、身舎が17×2間、



第66-1・13次調査遺構実測図(1:500)

その東西に庇が付く。柱間寸法は身舎が8尺等間、庇の出が7尺。身舎の検出した柱穴20のうち7に柱根が残る。長さ約1.2m、径約30cmである。これに対し庇の柱穴24のうち11に柱根が残り、長さ約60cm、径は約15cmと細い。このため第1次調査の段階では片流れの廊と推定したのであった。建物内部に玉石敷SX2731が施されている。石敷は東庇の柱列から約2.5m東まで確認でき、建物周囲から内部全体が舗装されていたらしい。石敷面は建物中心部が高く、周囲がやや低くなる。壁のない吹抜けの建物であろうか。

建物SB2672はSB2670の北3.9m隔てて柱筋を揃えて建つ南北棟建物である。東南の隅を検出したに過ぎないが、SB2670と同形式と想定される。両建物間の間を抜けて東に進むとSB2661の階段に達する。

塀SA2735は建物SB2670の南約7.5mにある東西塀で、柱間寸法は8尺等間で柱掘方は一辺約1.2mの方形で深さ約1mと大きく、北側からの柱抜き取り痕が明瞭である。

塀SA2745は建物SB2670の西約5.0mにある南北塀で、柱間寸法は8尺等間である。柱掘方は一辺約1mの方形で、柱根が1ヶ所残る。柱根は径約30cm、長さ約50cmで、礎板上に立つ。南へ延びて東西塀SA2735と接続し、L字形に区画施設の西南隅部を形成すると思われる。

溝SD2671は建物SB2670・2672のすぐ東を並行する南北溝で、両建物に共通する東雨落溝と考えられる。幅1.0m前後、深さ約0.3mで、底面に黄褐色の粘土を貼っており、また石敷SX2731とこの溝との境に石の並びが認められることから、石組溝であった可能性が強い。

溝SD2730Aは建物SB2670の南約2mにある東西石組溝である。東雨落溝SD2671が接続するものと考えられる。合流部の西側は幅約0.5m、深さ約0.2mで、北岸は2石以上小石を積んでいる。東側は幅が狭くなり、南岸は後世の小溝で壊されていると思われる。B期に造り替えがある。

溝SD2740Aは塀SA2735のすぐ南にある幅約5.0m、深さ0.5mほどの大規模な東西溝である。北岸には約1m間隔で丸太を打ち込んだしがらみの護岸がある。青灰色の細砂が堆積するが、含まれる遺物はごく少ない。B期に北岸を造り替

え幅を広くしている。

溝SD2750は塀SA2745の西約1.5mにある幅約2.6m、深さ0.4mほどの南北溝で、東岸は雑に石で護岸する。堆積土中から木簡・木製品・瓦・土器類が出土した。塀と同様SD2740とは接続すると思われるが、東西溝の方が規模が大きくかつ地形も西下がりなので、SD2740はさらに西方へ延びるものと思われる。

B期 掘立柱建物1棟・溝3条・礫敷などが新たに造られる。

建物SB2661が壊され、建物SB2662が建つ。また溝SD2671が埋め立てられて溝SD2686が造られ、溝SD2730が造り替えられる。

溝SD2686から東側、建物SB2662の南方の空間には礫敷SX2685が施される。礫は南ほど大きく密で、北ほど小振りかつ粗くなるが、明瞭な境界はない。表面は凹凸が著しく、飛鳥地域における既知の石敷や礫敷とは様相を異にする。この部分が旧流路にあたりじめじめしていたために敷いたものであろうが、上面は歩行には向いていない。

建物SB2662は3間×3間の総柱建物で、柱間寸法は東西が7尺、南北が5.5尺の東西棟である。柱掘方は1.0～1.3mの方形で、SB2661の柱掘方を切る。柱はすべて抜き取られていた。なおA期のSB2661と互いの中軸線を揃えている。

溝SD2686は溝SD2671の東約1.2mにある南北溝で、礫を雑に並べただけの石組溝である。幅約0.6m、深さ0.2mほどで、南方で東西溝SD2730Bと合流する。堆積土中から瓦類が多く出土した。

溝SD2730BはSD2686との合流部から西側でAの北岸を造り替えたものである。幅約0.3mで、北の側石は一部が残るのみで、SD2686との合流部と東側の状況は不明である。東側はA期のままであろうか。

溝SD2740BはしがらみであったA期の北岸を1mほど拡幅、さらに一抱えもある大石で護岸したもので、幅は約6.0m、深さ約0.5mである。堆積土は最下層が砂、その上が粘質土で、粘質土下部から砂層上部にかけて、木簡・木製品・瓦・土器などの遺物が多数出土した。

その他の遺構 第2次東調査区中央に東西に並ぶ柱が3本遺存している(SX2732)。柱間は西1間が7尺、東の1間が8尺で、その性格は不明である。時期はA期に属

する。西調査区の堀SA2745の東側に小さな井戸が1基ある（SE2737）。径1.85mの大きな掘方中央に一辺約0.6mの小さな方形の井戸枠をつくる。井戸枠は深さは約1.4mで、各辺2枚の一枚板を上下に重ね、最上部には大官大寺式の軒平瓦などを立てて使用している。平安時代の遺構である。

第1次調査区の東南部で、整地土をはずし下層遺構の調査を行った。地山面で東から西へ流れる自然流路SX2684を検出、北岸に沿って建築部材と思われる木材が横たわっていた。

また、東二坊大路想定位置に設けた調査区では、SD2750から西約12mまでは整地土が厚さ0.5mほどで広がるが、以西では中世以降に形成された大きな段差によって整地土は失われている。このため道路遺構は検出できなかった。

第2次調査と合わせて、村道拡幅に伴う調査を村道西側について行った。東西大溝SD2740の南方では、自然堆積土である礫層が床土直下にあられる。時期の不明な小穴・土坑のほか、まとまった遺構は検出できなかった。十一条大路想定位置を中心に設けた調査区では、7世紀代の土坑、古墳時代の斜行溝などを検出したが、側溝など大路に係る遺構は検出できなかった。

遺物

木簡・木製品・瓦類・土器類・石製品などがある。その多くは溝SD2686・2740・2750と礫敷上面から出土したものである。

木簡は第1次調査区の土坑SK2676から1点、第2次調査区の溝SD2740・2750から計10点出土しているが、(表)「神前評川辺里」(裏)「三宅人□人俵」と記した荷札1点、「黒月」と書いた断片1点を除き、ほとんどが削り屑である。木製品には独楽・斎串・糸巻・形代などがある。

瓦類には軒丸瓦22点、軒平瓦74点などがある。大部分は礫敷上面から出土した。大官大寺式の軒瓦が比較的多く、軒丸瓦6231Bが9点、6231Cが3点、また軒平瓦6661Bが16点ある。熨斗瓦10点も大官大寺式である。ほかには四重弧紋軒平瓦36点が目立つ程度で、軒丸瓦6233B・6278B、川原寺式E、雷紋縁の紀寺式、飛鳥寺Ⅲ、平吉遺跡Ⅰaなどの諸型式が各1点ずつあるに過ぎない。丸・平瓦には凸面布目の平瓦、縄叩きのある平瓦が含まれるが、全体的に数量は少なく、

しかもほとんどが小片である。「観智賢□是□」と墨書した平瓦の破片がSD2740から出土し注目される。

土器類は藤原宮期を中心に、7世紀後半のものが一定量を占め、奈良時代前半のものが少量ある。ほかに硯、新羅系土器などがある。

まとめ

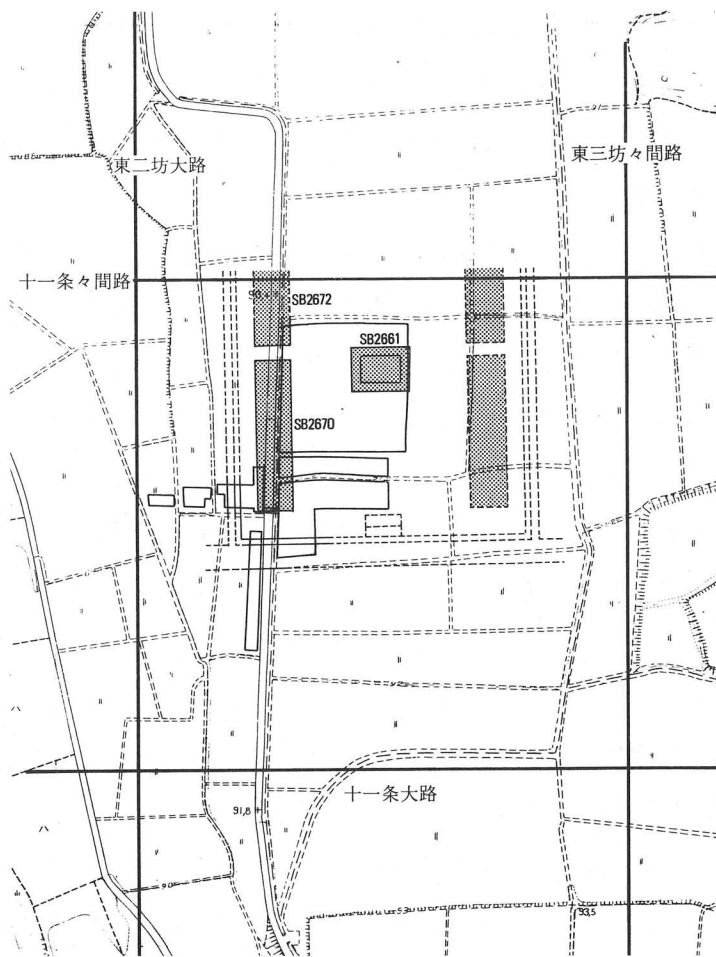
遺構配置 四面庇付きの東西棟建物の西方に2棟の南北棟建物が南北に並ぶことから、これを正殿と脇殿の関係と捉えると、正殿を中心とし東側にも同規模の南北棟建物の存在が想定できる。また、建物群の西と南に、掘立柱塀とその外側の溝とが組み合った区画施設が存在することから、正殿中軸線上南方に門が想定されるとともに、この遺跡の中心部分の東西規模が推定可能となった。遺構の配置にはその位置・距離などに計画性が窺える。北脇殿の南妻は正殿の北庇柱筋と揃い、西方の南北塀は南脇殿と柱筋を一致させるのである。また、正殿の中軸線から脇殿の中軸線までの距離は100尺、南方の東西塀の位置は正殿の心から150尺、西方の南北塀は同じく130尺にあたる。

占地・条坊との関係 正殿の中心は十一条三坊西南坪の中軸線にほぼ一致しており、南脇殿の南妻の位置もほぼ坪の南北二分線に合う。今まで十一条以南では条坊遺構は明らかになっていないが、上の状況とその存続時期からみて、この遺跡は条坊に則したものと推定してよい。また、北脇殿の規模は不明であるが、南脇殿の半分と見積っても西北坪へ渡ることは確実で、少なくとも南北二坪を占地していたことも明らかである。なお、西側の区画施設から東二坊大路心までの距離は約20mで、路面幅を考慮すると、溝SD2750と塀SA2745を実質的な西限施設とすることが可能である。一方南の溝SD2740と塀SA2735については、十一条大路まで約55mあることから、南限ではなく中心建物群の区画施設と考えられよう。

建物の規模 正殿は四面庇付きで、柱間寸法が大きく、また柱の掘方もきわめて大型である。藤原京内で今までに判明している、一坪占地の邸宅跡である右京七条一坊西南坪の正殿（柱間桁行9尺・梁行7尺、掘方の大きさ1.1～1.7m）と比較すると、その規模の大きさは際だっている。また、脇殿も東西両庇つき

で、南脇殿の17間に匹敵する長大な建物は京内では知られていない。

遺跡の性格 2回の調査によって、この遺跡が大規模な整地を行った後に形成されており、占地・規模・建物配置・時期などについてその一端を明かにすることができた。しかしながら、この遺跡の性格に関してはなお不明な点が多い。寺院、貴族の邸宅、官衙、宮などが候補として挙げられるが、建物の規模・形態、出土遺物などから前二者には無理がある。先に推定した建物配置について、北脇殿を南と同規模とし、さらに正殿の北に後殿の存在を想定してみると、宮殿遺構の典型とされる飛鳥稲淵宮殿遺跡のそれと極めて類似した形態となる。コ字形の建物群は政治的な場としての機能が考えられるが、雷丘北方遺跡の場合少なくとも二坪を占地しており、建物群の後方にかなりの空間があるため、ここに生活の場を想定することもできる。このような想定を重ねれば、宮としての性格づけも不可能ではない。しかし、現段階では調査面積もごく一部に過ぎず、その性格解明には今後の継続的な調査が必要である。



雷丘北方遺跡復原図 (1:2000)

4、右京一条一坊の調査（第65次調査）

（平成三年二月～三月）

この調査は大型店舗建設に伴う事前調査として、橿原市醍醐町で行なったものである。調査地は右京一条一坊南西坪にあたり、第60次調査（『概報20』）として発掘調査を既に行っているが、店舗設計変更のため今回は第60次調査区のすぐ南で調査を実施した。第60次調査では一条々間路、北西坪で井戸、南西坪で建物・土坑を確認している。今回は南西坪の宅地内部の様相を探るため東西2ヶ所の調査区を設定した。東調査区は第60次調査区の東に東西6m・南北21m、西調査区は第60次調査区の南に一部重複して東西24m・南北38mである。調査総面積は1110㎡となる。

調査区の層序は上から盛土・耕土・暗青灰色粘土（床土）・灰茶色粘質土・灰茶色微砂である。遺構検出は地表面下1.6mの灰茶色微砂上面で行った。

遺 構

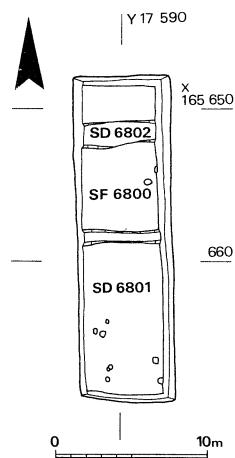
東区 検出した遺構には一条々間路SF6800とその両側溝・小穴がある。

SF6800は第60次調査で検出した条間路の延長上にあたり、路面幅5.6m、側溝心々距離6.8mである。北側溝SD6802は幅1.5m、深さ0.2 m、南側溝SD6801は幅1.2m、深さ0.3mで、いずれも素掘溝である。側溝からは多量の藤原宮期の土器が出土し、「郡」と記した墨書土器が含まれる。

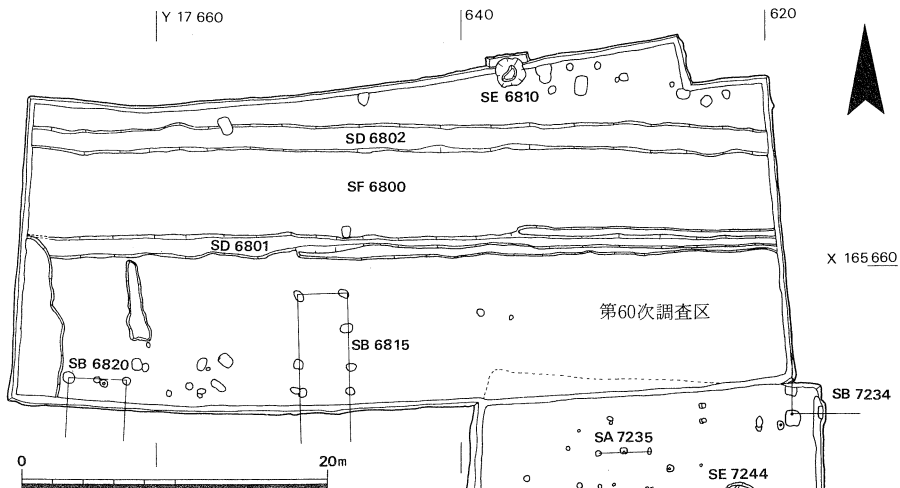
西区 検出した遺構には、7世紀から8世紀前半にかけての建物・塀・井戸・土坑のほか、中世の土坑・東西南北に掘られた小溝があり、7世紀から8世紀前半にかけての遺構は藤原宮期とその直前のものにわけられる。

〈藤原宮期の遺構〉この時期に属する遺構として建物4棟・塀1条・井戸3基・土坑5基がある。

SB7230は3間×2間の南北棟建物である。桁行7尺・梁行6.5尺で、一辺0.6mの柱掘方である。柱穴のほとんどに礎盤を残している。柱穴から飛鳥Vの土器が出土している。



第65次調査東調査区
遺構実測図 (1:500)



SB7231は4間×2間の南北棟建物である。桁行6尺・梁行5尺、一辺0.4mの柱掘方である。方位はやや西に振れる。柱穴から飛鳥Vの土器が出土している。

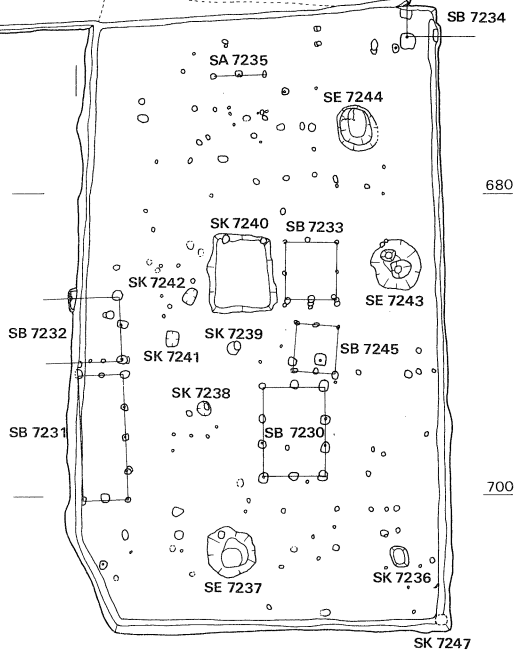
SB7232はSB7231と柱筋を揃え、やや北で西に振れる建物である。西半が調査区外となるため正確な規模は不明であるが、2間以上×2間の東西棟建物である。桁行10尺・

梁行7尺で、径0.6mの柱掘方である。柱穴から飛鳥Vの土器が出土している。

SB7234は調査区北東隅で検出した3個の柱穴で、建物の南西隅と考えられる。柱穴は一辺1.0mと大型の掘方であるが第60次調査では確認できず、建物の規模は不明である。遺物の出土はなかったが、藤原宮期の建物と思われる。

SA7235は東西2間の柵列で、柱間は11尺等間隔である。

SE7237は掘方径約3.2mのほぼ円形の井戸である。深さ1.7mで本来は木枠組と考えられるが抜き取られており、一部に裏込の礫が残っていた。埋土は、上から暗灰茶色粘質土・暗灰褐色粘質土・暗灰色粘土である。埋土から飛鳥Vの土



第65次調査西調査区遺構実測図(1:500)

器と共に、墨書土器・転用硯（杯）・漆の付着した杯・鞆羽口・砥石・刀子が、また裏込から藤原宮式軒平瓦（6641－Ab・E・F）が出土している。

SE7243は掘方外径約3.2mのほぼ円形の井戸である。掘り直しがあり、当初は深さ1.1mであったが、後にやや南東にずらし、深さ1.5mまで掘削している。埋土は上から暗灰褐色粘土・灰色粘土・淡青灰色砂・暗青灰色砂質粘土である。ここから飛鳥Ⅴ～平城Ⅱの土器と共に、「御」「十」などと記された墨書土器・鞆羽口・土馬が出土している。

SE7244は掘方外径は南北3m・東西2.7mのやや南北に長い円形で、深さ1.2mの井戸である。本来の木組の井戸枠を一部改修し、逆にL字形に板をたてならべている。埋土は上から炭混じり褐色土・黄褐色土・灰色粘土・青灰色粘質土である。飛鳥Ⅴ～平城Ⅱの土器と共に、転用硯（杯）・漆の付着した壺・土馬が出土した。

SK7236は南北1.4m・東西1.2mの隅丸の長方形の土坑で、深さ0.6mである。埋土は淡青灰色砂質土で飛鳥Ⅴの土器と共に墨書土器が出土している。

SK7238は一辺0.8mの方形の土坑である。深さ0.2mで埋土は灰褐色粘土である。飛鳥Ⅴの土器が出土した。

SK7239は径0.9mの円形の土坑である。深さ0.3mで埋土は灰色粘土である。

SK7242は長径1.2m・短径0.8mの楕円形を呈する土坑である。深さ0.2m、埋土は黄褐色粘土で飛鳥Ⅴの土器が出土している。

SK7247は調査区南東隅の壁面で検出した土坑である。規模・形態は不明であるが、深さ0.3mで埋土は炭混じり黒灰色粘質土である。

〈藤原宮期直前の遺構〉 建物2棟・土坑1基がある。

SB7233は2間×2間の南北棟建物である。南側柱に2つの柱穴の重複があり、2度の建て替えか、設計変更があったと考えられる。柱穴は径0.3mと小規模で、柱穴から飛鳥Ⅳの土器が出土している。

SB7245は1間×2間の南北棟建物である。桁行10尺・梁行4.5尺で、柱掘方は径0.3mの小規模な柱穴である。北でやや東に振れる。埋土や柱掘方がSB7233と類似することから藤原宮直前の時期と思われる。

SK7240は南北5.0m・東西3.7～4.4mの台形を呈する大土坑である。深さ0.4mで埋土は灰色粘土が堆積する。ここから飛鳥Ⅳの土器と共に漆の付着した杯・鞆羽口・鋳型が出土している。

〈中世の遺構〉 土坑1基と東西・南北に掘られた小溝がある。

SK7241は南北1.0m・東西0.8mの長方形の土坑である。深さ0.3mで埋土は暗灰色粘土・黄灰色砂質粘土である。遺物の出土はなかったが、小溝より新しいことから中世の遺構と思われる。

遺物

今回の調査で出土した遺物は、藤原宮期の土器・墨書土器・硯・漆付着土器・鞆羽口・銅滓付埴塼・銅製品・銅滓・鋳型・砥石・水晶・土馬・埴輪・瓦(6647-C・E)がある。

まとめ

第60次調査と今回の調査によって右京一条一坊南西坪の約十分の一を調査することができた。前回の調査と併せて確認した建物は藤原宮直前のものを含めても8棟と少なく、SB7234以外は規模も小規模なものである。それにも拘らず、井戸は今回の調査で3基確認され、そのいくつかは改修の痕跡が見られる。京内の他の調査で確認されている四町・一町規模の宅地の場合でも、井戸は1～2基程度であり、当坪における井戸の検出数は他に比べて多いといえよう。藤原京では宅地を四町から四分の一町の範囲で与えられていることが知られているが、小規模な建物にもかかわらず井戸が多いことは、宅地班給面積が小さく、それぞれの宅地ごとに井戸を設けていたか、なんらかの理由によって井戸を掘り直さなければならなかったものであろう。

遺物の中では、鞆羽口・銅滓付埴塼・銅製品・銅滓・鋳型・砥石のほかに漆付着土器の出土が目される。第60次調査でも鞆羽口・銅滓・埴塼などが出土しており、付近に銅製品の工房に関わる施設の存在が推定される。

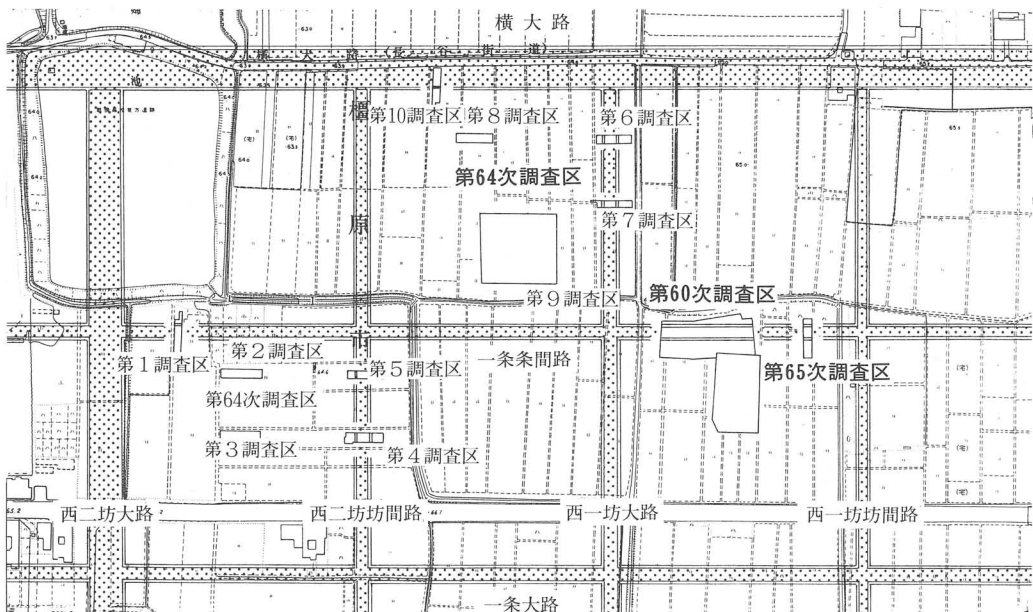
このように、小規模建物・井戸の多さ・工房に関わる遺物の存在などは隣接する第64次調査(本概報)でも見られ、藤原宮北方の横大路沿いにはこのような宅地利用がみられたのかもしれない。周辺地域での今後の調査を見守りたい。

5、右京一条二坊の調査（第64次）

（平成二年十一月～三年四月）

この調査は、橿原市醍醐町において実施した土地区画整理事業に伴う事前調査である。調査地は藤原京右京一条二坊に当り、その西南・東北両坪の大半と西北・東南両坪の一部に及ぶ。これまでこの坊を含めて藤原京の北辺地域においては大規模な発掘調査が少なく、本調査によって藤原京の北辺地域の状況と、藤原京の北辺に限ると推定されている古代の官道横大路に関する資料を得ることができるものと期待された。

土地区画整理事業地のうち今回発掘調査の対象となったのは、宅地の区域を除く道路敷および公園予定地だけで、上記の目的を果たすために、道路敷および公園予定地部分に10箇の調査区を分散して設けた（以下では、10箇の調査区を調査開始の順に従って第1～第10調査区と呼ぶ）。そのうち、第1～第5の調査区は、右京一条二坊西南坪を中心にして一部西北・東南両坪に及ぶように、第6～第10の調査区は、東北坪と一部右京一条一坊西北坪に互って設定した。西南坪を中心とした5つの調査区のうち、第1調査区は一条々間路、第4・5両調査区は二坊々間路の検出をそれぞれ主たる目的とし、また第2・3両調査区は西



第64次調査発掘区位置図（1：4000）

南坪の中心付近の状況を把握することを目指した。一方東北坪に設けた5つの調査区のうち、第6・7両調査区は西一坊大路、第10調査区は横大路の検出をそれぞれ目的とし、また第8・9両調査区は東北坪の中心付近の状況を把握することを目的とした。調査面積は併せて2600㎡である。

層序は各調査区で異なるが、いずれにおいても概ね耕土・床土及び1、2層の包含層を除去すると藤原宮期の遺構面に達する。遺構面は現地表からおよそ0.5～0.7mの深さにある。

検出した遺構には、条坊道路とその側溝・掘立柱建物・掘立柱塀・井戸・土坑などがあり、概ねこれらの遺構は7世紀後半から藤原宮期に属する。遺構については、個々の調査区毎に個別に取り上げるのではなく、便宜上条坊関連遺構と右京一条二坊に属する西南・西北・東南・東北の4坪、右京一条一坊の西北坪に分けて述べ、また一部で検出した奈良時代の遺構などは、各々上記各項目の関連箇所において述べることとする。

遺 構

(1) 条坊関連遺構

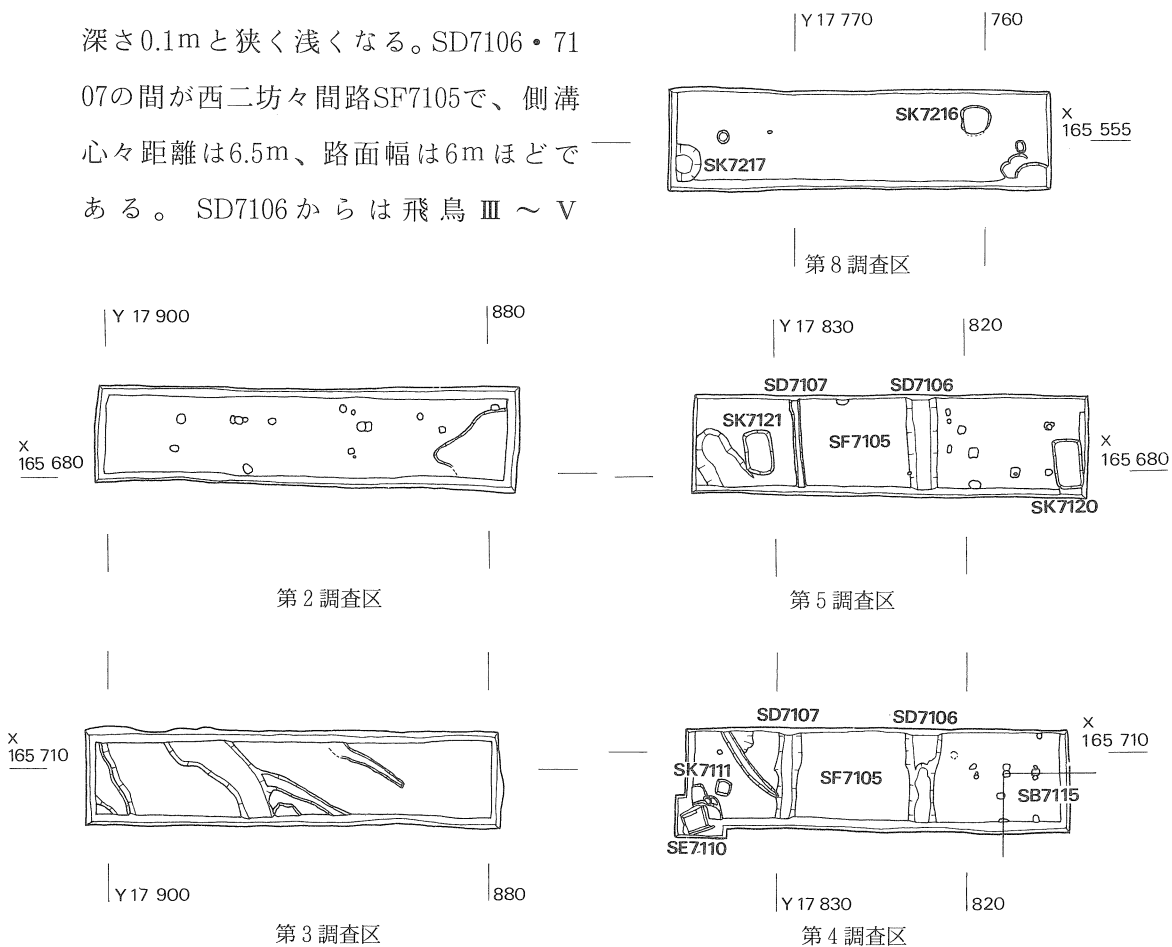
藤原京の条坊に関連した遺構としては、横大路とその南側溝、西一坊大路とその東西両側溝、西二坊々間路とその東西両側溝、一条々間路とその北側溝を検出した。

横大路SF7220とその南側溝SD7221は第10調査区で検出した。SD7221は幅1.1m、深0.35mの素掘の東西溝で、飛鳥Vの土器少量を出土した。第10調査区では、SD7221以北に顕著な遺構がないのに対して、以南に黄色粘質土と灰褐色砂質土とを交互に積んだ厚さ0.2mの整地土SX7225が南北9.4mの幅で広がっていることを確認した。まずSD7221以北に顕著な遺構が見られないのは、これより北が横大路の路面敷で、SD7221が南側溝に当たることを示唆する。一方第10調査区内で北側溝に当たる溝を検出していないことから、横大路の路面は調査区外北方に及び、路面幅は10m以上と推定することができる。またSD7221以南で検出した整地土については、性格が明かではないが、如上のように横大路南側溝SD7221以北に及ばず、また第10調査区南辺以南に広がらないことから、右

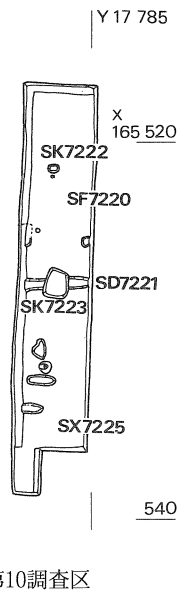
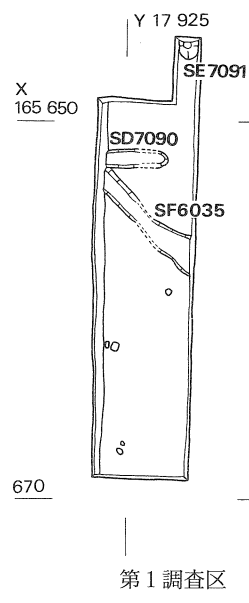
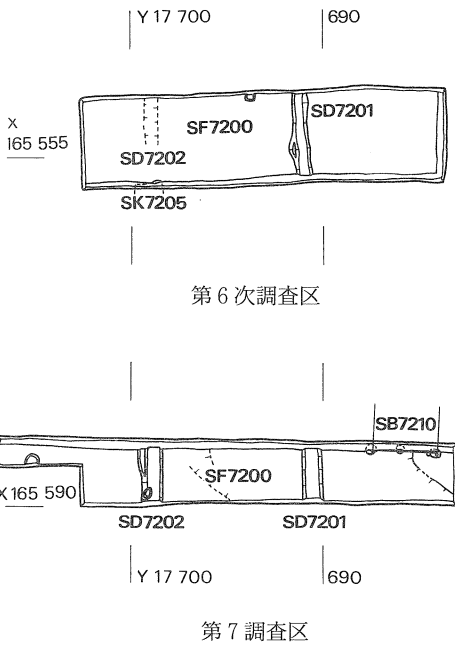
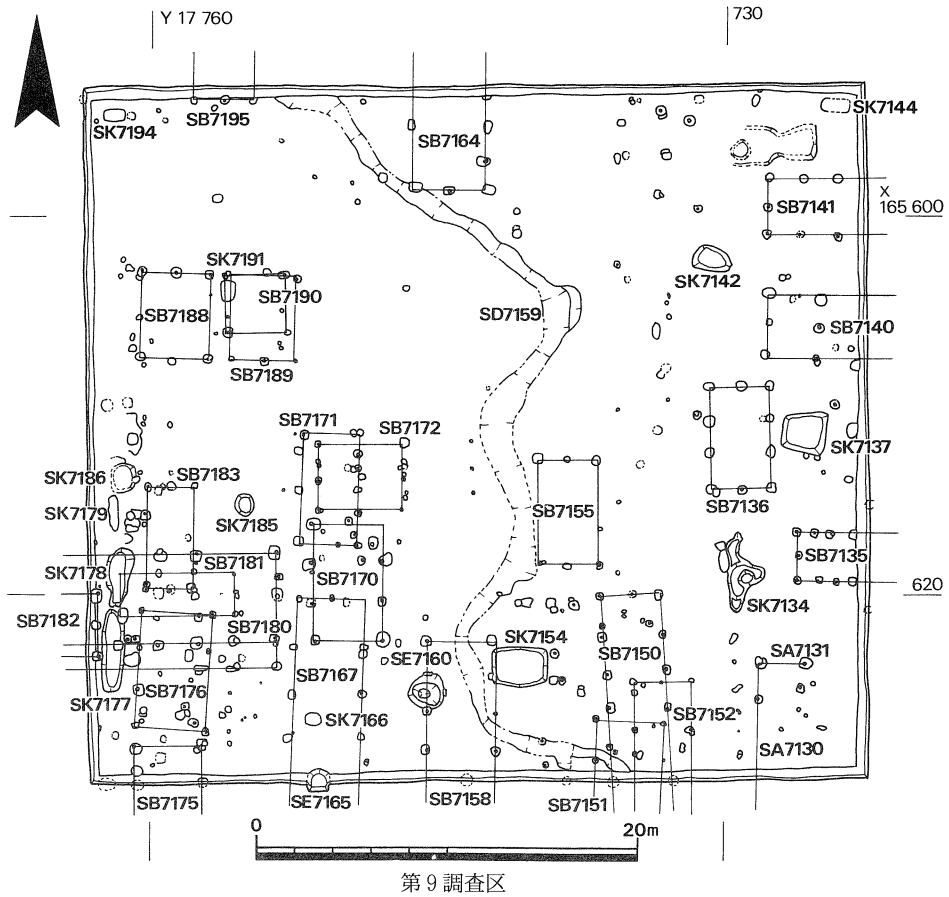
京一条二坊東北坪の北辺を限る何等かの施設に関わる地業である可能性を想定することもできる。

西一坊大路SF7200とその東西両側溝SD7201・7202は、第6・7両調査区で検出した。両調査区ともに後代の溝等で著しく削平され、西一坊大路とその東西両側溝の規模や状況を十分に明かにすることはできなかったが、現状で東側溝SD7201が幅0.9m、深さ0.3m、西側溝SD7202が幅0.9m、深さ0.1mの、それぞれ南北素掘溝で、両溝の間が西一坊大路SF7200の路面敷である。側溝心々距離は8m、路面幅は約8.5mである。いずれの溝も飛鳥Vの土器を出土した。

西二坊々間路SF7105とその東西両側溝SD7106・7107は、第4・5両調査区で検出した。東側溝SD7106は幅1.5m、深さ0.5m、西側溝SD7107は幅1.1m、深さ0.3mの、共に南北素掘溝である。SD7107は北に位置する第5調査区内では幅0.5m、深さ0.1mと狭く浅くなる。SD7106・7107の間が西二坊々間路SF7105で、側溝心々距離は6.5m、路面幅は6mほどである。SD7106からは飛鳥Ⅲ～V



第64次調査遺構実測図 (1 : 400)



第64次調査遺構実測図 (1 : 400)

の土器、SD7107からは飛鳥Ⅴの土器がそれぞれ出土した。

一条々間路SF6035とその北側溝SD7090は、第1調査区で検出した。SD7090は幅1m、深さ0.3mの東西素掘溝で、調査区中央で急激に浅くなって消滅し、東へは延びない。この溝から飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が出土した。SD7090は第56次調査で検出した一条々間路北側溝のほぼ西延長上にあり、一条々間路の北側溝と推定される。これに対して当調査区内では南側溝に相当する溝を検出することができなかった。従って一条々間路の規模は当調査区内では明かにし得ない。

(2) 右京一条二坊西南・西北・東南・東北各坪の遺構

右京一条二坊を構成する4つの坪の内、西南・西北・東南の3坪については、第1～5の各調査区で、また東北坪については第6～10の各調査区で調査した。

①西南坪の遺構 西南坪では井戸1基、土坑2基を検出した。

第4調査区の西南端で検出した井戸SE7110は、縦棧横板組の井戸枠1段分が残存し、北で西に振れる方位をもつ。井戸枠は一辺が1.2mある。掘方および井戸枠の西南隅部分が調査区外に及ぶため、一部拡張して遺構検出を行ったが、掘方は拡張区内で収まらず、井戸枠のみ規模を確認した。底までの深さは0.8mで、埋土には齋串などの木製品や飛鳥Ⅴの土器、瓦などが含まれていた。土坑は第4・5両調査区でSK7111とSK7121の2基を検出した。SK7111は一辺0.8mの隅丸方形を呈し、深さ0.5mある。またSK7121は東西1.5m、南北2.5mの長方形の土坑で、深さは0.3mである。埋土からは奈良時代に属する土器が出土した。

なお西南坪の北半の中央部に設けた第2・3両調査区では、わずかに小穴が数个検出されたのみで、他に藤原宮期に属する遺構を認めることができなかった。

②西北坪の遺構 西北坪自体第1調査区の北端に僅かに一部がかかるだけであったために、西北坪で検出した遺構は井戸1基のみである。

第1調査区で北へ拡張して検出した西北坪内の井戸SE7091は、北端が調査区外北方へ延びるため、規模は判明しないが、現状で東西1m、南北0.9m以上の長円形を呈する。深さは1.1mで、埋土には飛鳥Ⅲの土器が含まれていた。

③東南坪の遺構 東南坪には掘立柱建物1棟、土坑1基と多数の穴がある。

第4調査区の東端で検出した掘立柱建物SB7115は、南北3間以上、東西2間以

上で、棟の方向は明かではない。柱間寸法は、南北の柱間が1.4m、東西の柱間が1.5mである。第4・5両調査区ではこの他に内部に小穴を有する穴を多数検出した。これらの穴は柱穴で、内部の小穴は柱痕跡と推定されるが、調査区内で建物としてまとまるものはない。土坑SK7120は第5調査区の東端で検出した、長方形の平面を呈する土坑で、東西1.3m、南北2.8m、深さ0.3mある。年代を推定するに足る遺物は出土しなかったが、埋土が第5調査区の西端近くで検出した西南坪内の土坑SK7121と同じことから、ほぼ同じ時期、即ち奈良時代に属すと思われる。

④東北坪の遺構 東北坪内で検出した主な遺構には、掘立柱建物・掘立柱塀・道路・溝・井戸・土坑、などがある。これらの遺構の大半を検出したのは、坪の南半中央部に設けた第9調査区においてである。掘立柱建物・掘立柱塀は各々24棟と2条で、棟方向・規模・柱間寸法などについては表1に掲げた通りであり、詳細はそれに譲ることとする。これらの建物や塀は柱穴の重複関係や棟方向、あるいは柱筋などの点から、少なくとも3つの群に分けて考えることができる。即ち第一は、棟方向がほぼ北を向いた建物群で、検出した大多数の建物がこれに属する。しかしこれらの建物には重複関係のあるものがあり（SB7151とSB7152、SB7171とSB7172、SB7181とSB7183）、少なくとも二時期に互ると推定される。また第二は棟方向が北でやや西に振れる一群の建物（SB7150・SB7170・SB7180）である。ただしこれらの建物も全く同じ振れをもつわけではない。第三は棟方向が北でやや東に振れる一群の建物（SB7135・7167・7171・7176・7188・7189、SA7130・7131）である。この内SB7189は第一群に属するSB7190と柱穴に重複関係があり、それより新しい。以上のように掘立柱建物・掘立柱塀は、重複関係や棟方向などの点から四時期以上に互って建てられたものであることが分る。しかし第9調査区東辺で検出したSB7136・7140・7141の3棟が柱筋を揃えるなどやや計画的な配置をとる以外に必ずしも整然とした建物配置をとっていない。

井戸は第9調査区で2基を検出した。SE7165は第9調査区の南辺で検出したほぼ円形の平面を呈する素掘の井戸で、掘方は東西1.3m、南北1.3m以上ある。深さは1.1mで、埋土からは飛鳥Ⅳの土器が出土した。またSE7160は第9調査区

の南辺中央付近で検出した井戸である。井戸枠が抜き取られていたために、規模は明かではないが、現状で平面は南北1.8m、東西2mの隅丸長方形を呈し、深さは1.3mである。抜き取り後の埋土には瓦や飛鳥Vの土器が含まれていた。

土坑は第6～10調査区において多数検出した。詳細は表2の通りである。検出した土坑の中で特徴のあるものについてのみ記すこととする。第9調査区の西辺で、南北に列なるSK7177・7178・7179・7186の4基の土坑を検出した。これらの土坑からは多量の土器を出土した。いずれも飛鳥Vの土器である。また第9調査区の東辺中央にあるSK7137は土取りのために掘られた土坑と思われ、底部に鋤先の痕跡が多数残っていた。埋土から飛鳥Vの土器が出土した。

なお第9調査区中央部で南北に蛇行して流れる流路SD7159は、最大幅が2mあるが、深さはわずかに0.1mほどである。堆積土は上下2層に分けられ、上層は

遺構名	棟 方 向	規模 (桁行×梁間)	柱間寸法 (桁行・梁間)	備 考
SB7135	東西	3間以上×2間	1.0m・1.2m	北でやや東に振れる
SB7136	南北	3間×2間	1.8m・1.8m	
SB7140	東西	1間以上×2間	2.7m・1.8m	
SB7141	東西	2間以上×2間	1.8m・1.5m	
SB7150	南北	5間以上×2間	2.1m・1.6m	やや北で西に振れる
SB7151	南北	1間以上×1間	2.1m・3.5m	
SB7152	南北	4間以上×2間	1.3m・1.5m	
SB7155	南北	3間×2間	1.8m・1.2m	
SB7158	南北	3間以上×1間	2.0m・3.6m	SE7160より新しい
SB7164	南北	3間以上×2間	1.6m・2.0m	
SB7167	南北	3間以上×2間	2.4m・1.8m	北でやや東に振れる
SB7170	南北	3間×2間	2.1m・1.8m	わずかに北で西に振れる
SB7171	南北	4間×1間	1.0m・2.5m	
SB7172	東西	2間×2間	2.1m・1.8m	
SB7175	南北	1間以上×2間	1.8m・2.1m	
SB7176	南北	3間×1間	1.9m・3.6m	やや北で東に振れる
SB7180	東西、南廂付	4間以上×2間	2.0m・2.2m	やや北で西に振れる、廂出1.4m
SB7181	東西	3間×2間	2.0m・1.1m	
SB7182	東西	?×2間	?・1.6m	東妻のみ検出
SB7183	南北	3間×2間	1.6m・1.2m	
SB7188	南北	1間×2間	4.5m・1.8m	やや北で東に振れる
SB7189	南北	1間×2間	4.5m・1.8m	わずかに北で東に振れる
SB7190	東西カ	1間×1間	3.0m・3.0m	
SB7195	南北	?×2間	?・1.6m	南妻のみ検出
SA7130	南北	2間以上	3.0m	
SA7131	東西	1間	2.4m	

表1 東北坪内の遺構

暗褐色粘質土、下層は灰褐色粗砂である。重複関係から見てSB7168をはじめいずれの掘立柱建物群よりも古い、弥生時代後期から古墳時代の土器が極少量含まれているに過ぎず、年代の詳細は不明である。

(3) 右京一条一坊西北坪の遺構

右京一条一坊西北坪は、第6・7両調査区で遺構の検出を行い、第7調査区で掘立柱建物1棟を検出した。

掘立柱建物SB7210は恐らく南北棟建物で、その南妻と思われる東西に並ぶ3個の柱穴を検出した。西で北にやや振れる方位をもち、柱間寸法は1.6mである。

遺物

出土した遺物には土器・瓦埴・土製品・金属製品・石製品・木製品がある。

土器は藤原宮期の須恵器・土師器が大半を占め、中には墨書や篋記号を施したものの、漆の付着したものがある。墨書土器は第9調査区のSE7165から出土したもので、土師器の大皿の底部に「百□」と墨書されている。**瓦埴**には藤原宮式の軒丸・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。軒瓦はいずれも藤原宮式で、軒丸瓦には6233B・6273B・6278Bの各型式があり、軒平瓦には6641F型式がある。これらの軒瓦はいずれも第9調査区の包含層から出土した。**土製品**には円面硯・ガ

遺構名	形 状 ・ 規 模	調査区	備 考
SK7134	不整形、南北4m、東西2.5m、深さ25cm	第9調査区	飛鳥Vの土器出土
SK7137	方形、南北2.3m、東西2.4m	第9調査区	飛鳥Vの土器出土
SK7142	長円形、南北1.4m、東西2.1m、深さ80cm	第9調査区	飛鳥Vの土器出土
SK7144	長方形、南北90、東西1.6m	第9調査区	
SK7154	長方形、南北2.2m、東西3m、深さ1.1m	第9調査区	
SK7166	方形、南北75cm、東西85cm、深さ40cm	第9調査区	
SK7177	長円形、南北4.4m、東西1.2m、深さ50cm	第9調査区	飛鳥Vの土器出土
SK7178	不整形、南北3.2m、東西1.3m、深さ30cm	第9調査区	
SK7179	長円形、南北2m、東西60cm、深さ25cm	第9調査区	
SK7185	円形、直径1m、深さ50cm	第9調査区	7世紀の土器出土
SK7186	方形、1辺1.5m、深さは15cm	第9調査区	飛鳥Vの土器出土
SK7191	長方形、南北1.2m、東西90cm、深さ30cm	第9調査区	7世紀の土器出土
SK7194	長方形、南北60、東西1.2m、深さ20cm	第9調査区	飛鳥IV・Vの土器出土
SK7205	不整形、南北不明、東西不明、深さ不明	第6調査区	
SK7216	隅丸方形、南北1.4m、東西1.2m、深さ50cm	第8調査区	飛鳥Vの土器出土
SK7217	円形、南北2m、東西1.4m、深さ60cm	第8調査区	飛鳥Vの土器出土
SK7222	方形、南北75、東西90cm、深さ25cm	第10調査区	馬骨出土
SK7223	方形、南北1.8m、東西1.4m、深さ25cm	第10調査区	

表2 東北坪の土坑

ラス坩堝・鞆羽口・土馬・有孔円盤・埴輪がある。ガラス坩堝は第9調査区のSE7165・SK7186・包含層から体部片が合計4点出土した。このうちSE7165出土のものは、内面に銀化した緑灰色のガラス質が付着しており、他のものは黄緑色



SD7106出土 錢貨(1:1)

である。金属製品には、錢貨・帯金具・刀子・鉄釘がある。錢貨では第5調査区の西二坊々間路東側溝SD7106から出土した富本錢1点が注目される。表面には上下に「富」「本」の2字、左右に七曜文を亀甲形に配する。「本」は「大」と「十」の合字で表現され、背面は無文である。外径は2.4cmである。SD7106は出土遺物から平城遷都時には埋められていたことが明らかで、富本錢の出土例としては最古のものとなる。石製品には砥石・石鏝が、木製品にはSE7110から出土した齋串がある。

遺物の中では富本錢とガラス坩堝が類例が少なく注目されるが、ほかに鞆羽口・砥石・漆付着土器・金属製品・鉄滓などの遺物が少量ながらも出土していることから、付近に工房関係の施設の存在が想定される。

まとめ

今回の調査において得られた成果は以下のとおりである。

(1) 藤原京の条坊に関連した遺構、即ち横大路・西一坊大路・西一坊々間路・一条々間路を、概ねこれまでの調査によって得られた成果から推定された位置において検出した。就中、藤原京の北を画すると推定される横大路とその南側溝を確認したことは重要で、今後北側溝と横大路の規模や京の北辺を画する施設の有無などの確認が必要である。

(2) 右京一条二坊の東南坪および西南・西北両坪では井戸と柱穴を検出したにとどまり、これら三坪の内部の状況については十分明かにすることができなかったが、東北坪については多数の建物などの遺構を検出し、藤原京の北辺地域においても小規模な建物が、藤原宮期を挟む数時期に互って建て替えられていることが判明した。また出土した遺物から付近に工房関係の施設の存在が推定されるに至った点は、藤原京の北辺地域の性格を考える上で重要である。

6、右京二条一坊の調査（第66－8次）

（平成三年八月～九月）

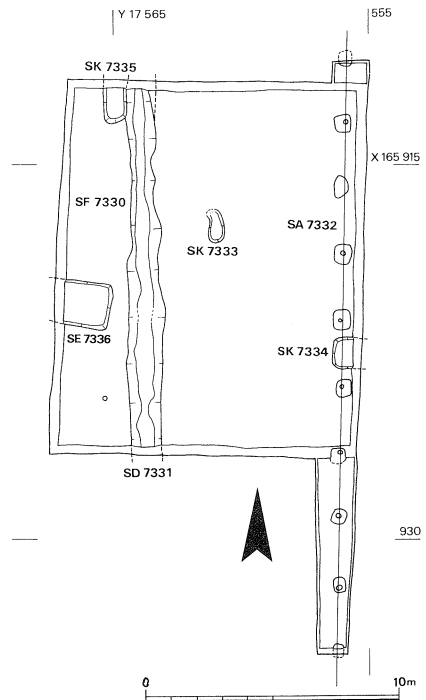
この調査は資材置場建設に伴う事前調査として、橿原市醍醐町で行ったものである。調査地は、藤原京右京二条一坊東南坪にあたり、調査地の西北方には二条々間路と西一坊々間路の交差点の存在が想定されている。当初は東西12m、南北15mの調査区を設定し調査を行ったが、その後一部拡張を行ったため、調査面積は192㎡となった。調査地の現況は畑地で、層序は、耕土・床土（茶灰色粘質土）の下が、南半では茶灰色砂質土、北半では灰褐色砂礫となり、地表下0.3m前後にある両層の上面で遺構を検出した。

検出した遺構は、藤原宮期の遺構として、西一坊々間路SF7330及び東側溝S D7331、掘立柱の南北塀SA7332、土坑SK7333、藤原京より後出のものとして土坑SK7334・7335、中世の小溝、現代の野井戸SE7336などである。

西一坊々間路SF7330は、路面幅の3m分を検出したのみで、西側溝は現市道下となる。

東側溝SD7331は幅1～1.2m、深さ0.25m前後の素掘溝で、堆積土からは飛鳥Ⅲ～Ⅴの土器が少量出土した。南北塀SA7332は東側溝心から東へ7.6mの位置にあり、9間分、23.7mを検出したが、柱間は不揃いである。東南坪の西を限る施設と考えられる。土坑SK7333は浅い土坑である。土坑SK7334・7335は隅丸方形の平面形をなし、深さは0.65～1mである。

この調査では西一坊々間路と坪を限る塀を確認したが、東側溝と塀の間は、従来の知見よりも広く、この間が藤原宮のように堀地として利用されていた可能性が残る。この問題については、類例の増加を待って検討したい。



第66－8次調査遺構実測図（1：300）

7、右京二条二坊の調査（第66－5次）

（平成三年六月～七月）

共同住宅建設に伴う事前調査である。調査地は醍醐の集落の西、国道165号線榎原バイパスと西日本旅客鉄道桜井線に挟まれた地で、東隣は長谷田土壇のある田である。藤原京二条二坊西北坪と西南坪に当る。

調査地の層序は、地表から順に約1.5mの近年の盛土・耕土・床土・黒褐色粘質土の遺構面となり、旧地表から約0.4mで遺構面に達する。

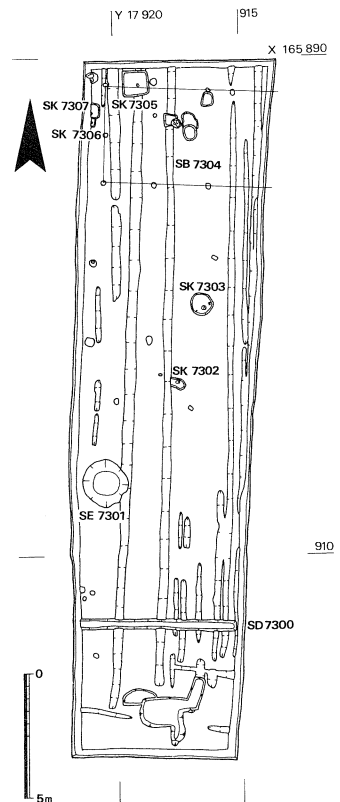
検出した主な遺構は、東西溝・井戸1基・掘立柱建物1棟・土坑2基である。

東西溝SD7300はほぼ二条々間路南側溝と推定される位置にあるが、その心が国土座標のX＝－165912.7の位置にあり、第54－23次・60－19次の調査の成果X＝－165913.5と比較すると0.8m北へ寄る。第54－23次西調査区と繋ぐと46分から49分西で北へ振れていることになり、SD7300を二条々間路南側溝と断定することはなお検討を要す。北側溝は検出されなかった。

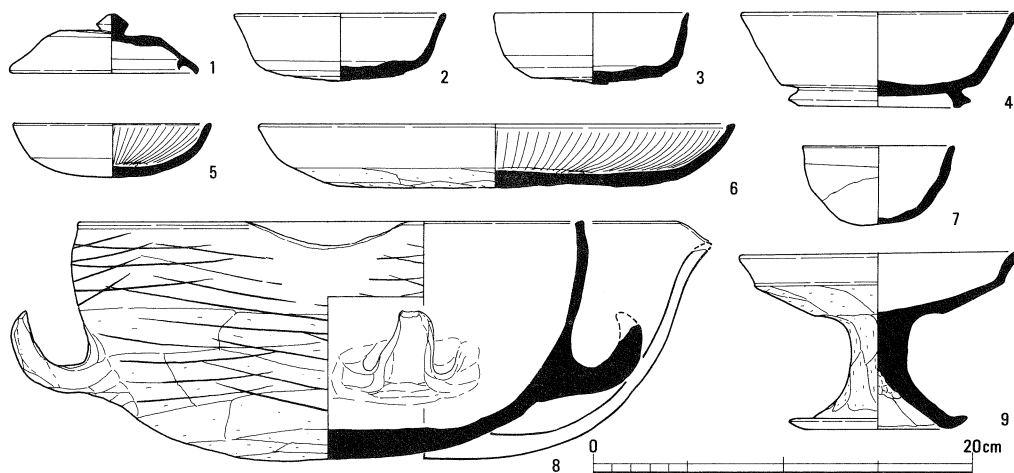
井戸SE7301は径1.8m、深さ2m余りの円形の掘方を持ち、井戸枠は抜き取られていた。埋土から瓦器が出土したので十二世紀前半に属する。井戸中より呪符と覚しき木簡が一点出土した。

掘立柱建物SB7304は調査区北端にあり、南北2間、東西3間以上、柱掘方は径0.2mとごく小さい。

土坑の内、SK7303は径が0.9mのほぼ円形で、深さは0.5m、中に完形の土師器・須恵器11点以上が含まれていた(45頁図参照)。いずれも7世紀後半代に属する。SK7302は東西0.6m、南北0.4mの楕円形平面で深さは0.2m、人頭大の石の下に土師器の甕等を据えていた。藤原宮期に属するかと考えられる。



第66－5次調査遺構実測図
(1 : 300)



SK7303出土土器実測図（1：4）

調査区北側の第42次の調査でも藤原宮期の遺構の密度は低く、今回も同様の傾向を示している。

8、右京十条四坊の調査（第66－6次）

（平成三年七月～八月）

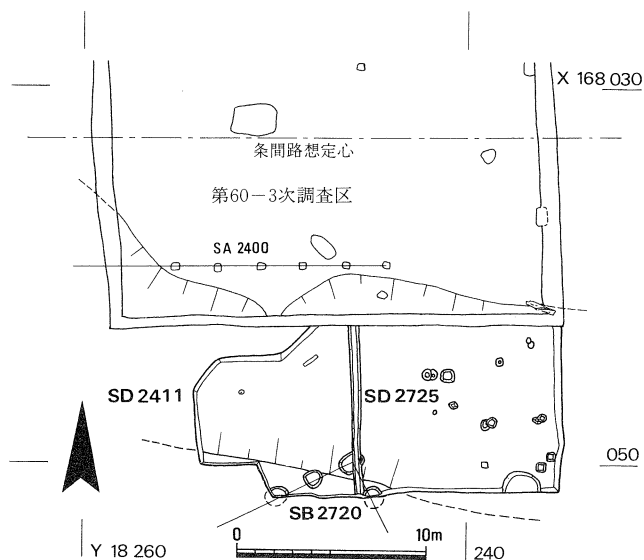
この調査は、関西電力が橿原市栄和町字柳田に計画した配電用変電所新設に伴う事前調査である。当該地については、平成元年五月から六月に発掘調査を行なっている（第60－3次調査、『概報20』）が、その後、周辺にマンションが建設されたことにより建設位置等の変更が必要となり、今回の調査はそれによって生じた未調査部分について行なったものである。第60－3次では、十条々間路想定位置で道路遺構は検出されなかったものの、藤原宮期の掘立柱塀と井戸・掘立柱建物などを検出し、調査区南端で古墳時代流路、下層で厚い砂に覆われた弥生時代後期とみられる水田遺構を検出している。また、平成二年に橿原考古学研究所が実施した隣接地の東北坪における調査では、藤原宮期の掘立柱建物と、それに先行し藤原京の地割と大きく異なる方位に建てられた掘立柱建物や掘立柱列を検出している。

遺 構

今回の調査では、先行する調査で明らかになった諸点、即ち藤原京右京十条

四坊東南坪内の藤原宮期の遺構、古墳時代流路、そして下層の弥生時代の水田について新たな知見を得ることを目的とした。

調査地の基本的な層序は、上から水田耕作土・床土・青灰色粘質微砂・暗灰色微砂質粘土であり、床土下面では南端を除き青灰色粘質微砂をえぐる



第66-6次調査遺構実測図(1:400)

ように灰色細砂あるいは褐色粗砂がほぼ全域に広がっている。この砂層は前回の調査成果から、古墳時代流路SD2411の堆積層にあたり、青灰色粘質微砂層と暗灰色微砂質粘土層は弥生時代の水田面であることが確認されている。遺構は砂層面(旧水田面下45cm)で検出し、その後古墳時代の遺構である流路の確認調査を行なった。

砂層面で検出した遺構には、掘立柱建物SB2720・素掘溝SD2725のほか、小規模な柱穴や土坑がある。

掘立柱建物SB2720は、真北に対して北で西に30°近く振れる方位の柱筋をもつ1間以上×2間以上の建物で、棟の方向は明かでない。柱掘方は一辺1~1.2mの不整形な方形で、深さは約0.4mである。南北素掘溝SD2725よりも古く7世紀中頃の遺構と考えられる。素掘溝SD2725は幅0.6m、深さ0.1mの南北溝で、暗灰色粘質土の埋土から7世紀後半の土器が少量出土した。極めて浅くしか遺存しないために第60-3次調査区では確認していない。

このほか調査区東半には、暗灰色粘土を埋土とする小規模な柱穴がいくつかみられる。周辺には藤原宮期前後の土器が見られることから同期の建物である可能性があるが、建物にまとまらない。

古墳時代の流路SD2411は、前回の調査でその北肩が確認されている。今回

の調査区はほぼ全域が流路の中にあり、部分的な調査にとどめた。流路は幅約9～11m、深さ1.5mで、堆積層の違いから、徐々に浅く狭くなる4時期以上の流れがあることがわかる。最下層の流れに古墳時代初めの壺形土器が含まれ、他の流れにも少量の弥生土器と古墳時代前半の土器が含まれる。また、最上層の流れに幅20cm、長さ90cmの板材が埋没していた。流路は北西へ流れている。

下層遺構である弥生時代の水田については、古墳時代流路で削り残された調査区の南端でその存在を確認した。南に広がっていることは明かであるが、調査可能な面積が狭く、畦・水路などは検討はできなかった。

まとめ

藤原宮期の遺構については前回の調査で確認した東西塀SA2400の南に柱穴等は検出されず、SA2400が坪の外周を画する塀である可能性が高くなった。しかし、坪内では明確な建物は検出されず、その利用形態は明かでない。

藤原京条坊に先行する建物については、今次調査地の北西部において、橿原考古学研究所が平成二年四月から七月にかけて行なった調査で同じ傾きをもつ建物と柱列を検出している。また、前回の第60-3次調査区の東端でも、同様の傾きをもった柱掘方を検出しており、今回検出した建物SB2720もそれらと一群をなす遺構とみられ、その時期は橿原考古学研究所の調査では7世紀中頃とされる。今回の成果からは7世紀後半以前であることが確認されるので、同時期としても矛盾はない。遺構群は東西幅約80m以上の広がりをもつことになる。

その場合、藤原京西京極大路として踏襲される下つ道が真北に近い方位で施工されていることは、7世紀初めとも言われている下つ道の施工を7世紀後半以降と考えるべきであるのか、あるいは同時期に方位の異なる建物群が営まれたと理解すべきなのであろうか。また、同様に真北に近い方位で造営されている飛鳥地域の7世紀代の遺構群といかに関わるのであろうか。以上の諸点は、この時期に都市的空間として成立しつつあると理解される飛鳥地域とその周辺地域を理解する上で、重要な課題である。

9、右京七条一坊の調査（第63－12次）

（平成二年十二月～三年二月）

この調査は、橿原市高殿町の西南部に計画された橿原市の分譲宅地造成に伴う事前調査の第3次目の調査で、第62次調査（『概報21』）の西、第63次調査（本概報）の南に位置する。

調査地の層序は、上から耕土・床土・青灰色粘土・暗灰褐色砂質土あるいは黄褐色粘質土・暗灰色砂あるいは暗褐色粘土である。調査区の東北部～中央部にかけての砂層は、第62次調査区西南部から延びる自然流路であり、幅50余mの規模で東南から西北方向に横断していることになる。流路の西の暗褐色粘土は、弥生時代中期から後期の遺物を含む堆積層で、その上の暗灰褐色・黄褐色粘質土は藤原宮期の整地土とみられる。

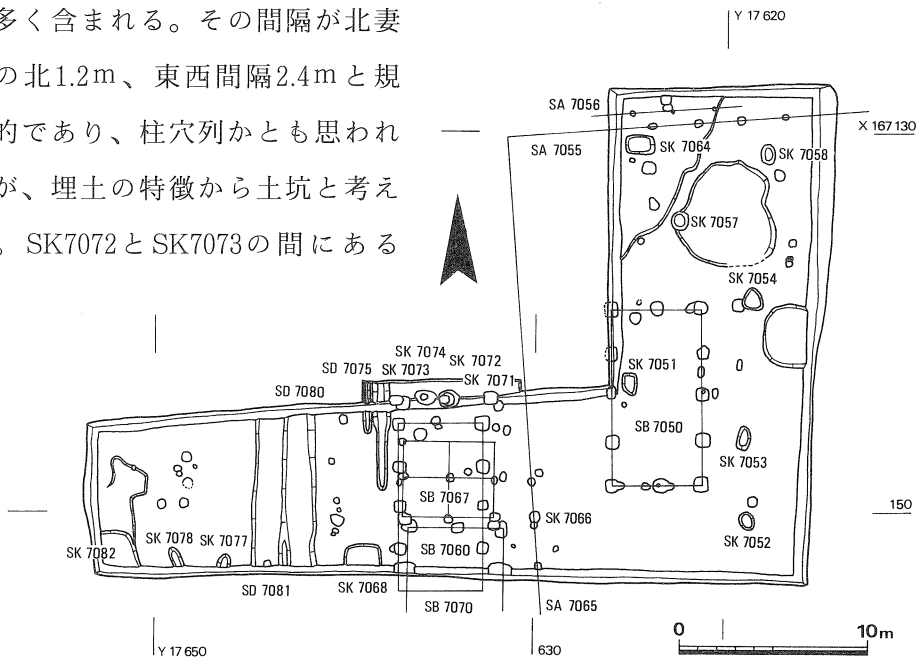
遺 構

遺構は青灰色粘土の下面、すなわち藤原宮期の整地土面で検出し、主な遺構には南北素掘溝3条、掘立柱建物3棟、掘立柱塀3条、土坑11基がある。

掘立柱建物SB7050は調査区東寄りの南北棟で、南北4間（柱間2.4m等間）、東西2間（2.4m等間）である。一辺約0.6m、深さ0.6mの柱掘方に直径15cmの柱痕跡がある。建物は北で西へ僅かに振れる方位を持ち、柱間数・柱間寸法・柱掘方の規模は、第62次調査区の南北棟建物SB6485と酷似している。**掘立柱建物SB7060**はSB7050の西側柱列の西6.7mに東側柱列を置く東西2間、南北4間以上の南北棟で、SB7050と同様に北で西へ僅かに振れている。柱穴は一辺0.6mの方形で、深さ0.5m分が遺存する。柱間は桁行梁行ともに2.2m等間、南妻柱列は調査区の南外方にでる。**掘立柱建物SB7070**はSB7060の南に重複する南北棟建物で、北の1間分のみを検出した。柱穴は一辺0.6～1.2m、深さ0.5mの不整形で、埋土は上半部が円礫を含む青灰色粘土、下半部が暗灰色粘土であって、上半部が柱抜き穴であるかも知れない。柱間は梁行・桁行ともに2.4m等間である。藤原宮期のSB7060より古く、藤原宮期あるいはその直前期の遺構と考えられる。なお、これらと重複する小円形柱穴群はSB7060より古い時期の南北棟

あるいは総柱建物SB6067としてまとまるとも考えられるが、確定的でない。
 掘立柱東西塀SA7055、南北塀SA7065はともに、一辺0.3mと小規模な柱穴で、
 柱間は2.4m等間で、第62次調査のSA6486やSB6475などと同じく北で約4度西に
 振れる方位であり、同時期と考えて良ければ藤原宮造営以前の7世紀代に位置
 付けられる。なお、SA7055の北の掘立柱塀SA7056はSA7055と同様の方位にあ
 る2間以上（2.1m等間）の東西塀であるが、小円形の柱掘方を持つことからす
 れば藤原宮期以降の塀であろう。

建物SB7050の東には不整形な土坑が南北に並び（SK7052・7053・7054）、北
 にも2基の土坑（SK7057・7058）が点在する。SB7050内の土坑SK7051ととも
 に土坑暗灰褐色粘土の埋土で藤原宮期の土器と木質物が含まれている。SB
 7060の北妻柱列の北1.2mにも土坑SK7071・7072・7073が東西に等間隔に並ぶ。
 土坑の埋土は共通しており、漏斗形に開く上半部には木質層を間層として青灰
 色粘土と砂の互層がレンズ状に堆積し、垂直近くに掘り込まれた下半部には暗
 灰色粘土と粗砂の互層が水平堆積する。底までの深さは0.6～0.9mである。埋
 土下層から藤原宮期の土器が少量出土し、上層の木質層には木簡とその削り屑
 が多く含まれる。その間隔が北妻
 柱の北1.2m、東西間隔2.4mと規
 則的であり、柱穴列かとも思われ
 たが、埋土の特徴から土坑と考え
 る。SK7072とSK7073の間にある



第63-12次調査遺構実測図（1：400）

土坑SK7074は、楕円形の浅い掘鉢状で、青灰色粘質土で埋められている点で他と異なるが、これにも削り屑状の木質層があり、他の土坑と同様の目的で掘られたと考えられる。

建物SB7060の西にある南北溝SD7075は幅1.0m、深さ0.3mの素掘溝で、調査区中程から南では痕跡的になって途切れてしまう。底に灰色細砂が堆積し、暗茶褐色砂質土で埋められている。飛鳥Ⅱ～Ⅴの少量の土器と木質物が出土した。この溝は北側の第63次調査区の南北溝SD6918と位置及び堆積土が一致し、それに連なる溝であり、ここでは東西溝SD6510より新しい。

南北溝SD7080はその西の南北溝SD7081の東肩を壊して掘られた素掘溝で、幅1.8m、深さ0.3mである。暗褐色粘質砂土の埋土には7世紀前半の土器とともに藤原宮期の土器が少量含まれる。第63次調査区の南北溝SD6919に連なり、東西溝SD6510より新しい。建物SB7060やSB7050と同一方位をとり、この溝の西には柱穴がないことからすれば、西北坪内を区分する溝と考えられる。南北溝SD7081については第63次調査区では確認していないが、きわめて浅くしか遺存しないことから、同調査区では削平されてしまったものとみることができ、今次調査区で併走する事から、SD7080の前身遺構にあたりと考えておく。

調査区西端に広がる土坑SK7082と調査区南に点在する小規模な土坑SK7077・7078・7068はともに、炭化物を含む黄褐色粘土を埋土とする浅い土坑で、藤原宮期の土器と藤原宮式の瓦片が少量出土した。炭化物を含む土坑は、東方の第62次調査区の南半部にも多数存在し、それらとの関連が想定される。

遺物

瓦類、土器・土製品、金属製品、木製品がある。瓦類は土坑SK7068から軒丸瓦6274Abが出土したほか、整地土などに少量含まれる。ほとんどが日高山瓦窯で作られた藤原宮所用のものである。なお、瓦窯の壁と考えられる焼土が数点みられることから、これらの瓦類は坪内の建物所用ではなく、瓦窯からもたらされた流入物と見ることが出来る。土器では南北溝SD7080等出土の7世紀前半と藤原宮期の土師器・須恵器の他、下層の暗褐色粘土や暗灰色砂層に含まれる弥生土器・古式土師器が少量ある。藤原宮期以前の7世紀前半代の土器の

出自については藤原京域の開発の開始と関わって興味深い。土製品には円面硯があり、ほかに須恵器杯蓋の転用硯がある。転用硯と灯明皿に利用された土器が多いことはこの坪の特徴である。また文字は判読できないが須恵器杯の底部に墨書がある。金属製品では弥生～古墳時代初頭の流路出土の銅鏃が珍しい。

木簡は、SK7071・7072・7073などの土坑から約725点出土したが、大半は削り屑（708点）であり、断片的である。釈読できる文字には「戸主」「戸廿四」「少女」「疾」「長十五丈」「大初位」「□地損破 板屋一間」「伴マ」などがあり、帳簿状の用例に多い板材を横方向に使ったものがある。第62次調査の井戸SE6495から出土した「年六十三」と共に、京内出土木簡としては特異な内容を含んでいる点はこの坪の性格を示唆するものとして注目される。

まとめ

今回の調査で検出した遺構の内、配置と重複関係・出土遺物から藤原宮期に属すると考えられるのは、建物SB7050・SB7060、南北溝SD7080、木質物を含む土坑SK7071・SK7072・SK7073・SK7074・SK7051・SK7052などである。

先行の第62・63次調査とあわせると、右京七条一坊西北坪の北三分の一をほぼ調査したことになる。これらによれば西北坪北三分の一内は、東四分の一余を南北溝SD6512で仕切り、西三分の一を南北溝SD7080で区切った中央部に、比較的小規模な掘立柱建物を数棟つつ配置している。これは坪の中心部に正殿・脇殿・前殿等を整然と配置して、一坪全体を占めた宅地である西南坪とは異なる利用形態である。ただ、西北坪でのこれまでの調査地が坪の北に片寄っている点で、なお南に中心的建物群の存在するだけの空間はある。西南坪も周辺部は塀で区切られて小規模な建物が散在するようであり、西南坪と同じ配置は採れないものの、西北坪が一坪全体を占めて利用された可能性は残される。

また、小規模な建物と土坑群及び井戸で構成される坪北半部の性格については、第62次調査の井戸と今次調査の土坑群から出土した木簡はこの坪が通常の宅地ではない可能性を示唆するが、具体的な利用形態と性格については、なお明かでない部分が多く、第63次調査との間（第66—12次調査）及び、坪の南半分での今後の調査の進展を待って検討したい。